

祖堂集卷第二十 江西下卷第七曹溪第六代法孫

五冠山瑞雲寺和尚、仰山寂禪師に嗣ぐ、師、諱は順之、俗姓は朴氏、涇江の人なり。

祖考並びに家業雄豪にして、出でて邊將と為る。忠勤の誉れ、遺慶、郷に在り。母昭氏柔軟母儀、閭里に芬芳たり。懐娠の日、頻りに吉祥を夢む。免腹の時、即ち異瑞多し。昔賢此くの如し、今又た焉を徴す。

竹馬の期に及んで漸く牛車の量有り。凡よ嬉戯を為すに、必ず常に殊ことなることを表す。已に十歳に至りて、精勤にして学を好む。詞を属し志を詠すれば即ち雲を凌ぐことを見あらわし、義を刮き玄を談すれば鏡に照あらずに同じきが如くす。

既に弱冠に登りて、道牙早に焚し、喧華の地に處ることを厭い、長ながに静黙の中に遊べり。遂に乃ち懇ろに二親に告げ、將に緇侶に随わんとせり。志奪とつ可からず。所天容許す。

便ち五冠山に投じて剃髮し、仍りて俗離山に適きて具足戒を受けたり。行は結草に同じく、心は護鵝に比す。公岳に遊ぶに因りて、忽ち神人邀請するに遇いたり。宮闕を化成せるに兜率天の若し。法を説きて縁に應ずるに倏焉として殄滅せり。若し徳至り行圓かなるに非ざれば、孰れか能く此くの如きを感じることを致さん。

大中十二年に泊んで私かに誓願を発し、上國に遊ばんと擬ぼす。入朝使に随つて雲溟を渉るに利あり。一隻の船に乗りて萬重の浪を過ぐるに曾つて懼るる念無く、不動にして安禪す。

逕ちに仰山慧寂和尚の處に到り、虔誠もて礼足し、弟子と為らんことを願えり。和尚覓み介として笑つて曰く、来たること何ぞ遅きや。縁何ぞ晩かりしや。既に志す所有り。汝の住留するに任す、と。禪師、左右を離れずして、玄宗を諮稟するもの、顔回の夫子の下に於けるが若く、迦葉の釈尊の前に於けるが如くせり。彼中かの禅侶、皆な増す歎伏せり。

乾符の初、松岳群の女檀越元昌王后及び子の威武大王、五冠山龍巖寺を施す。便ち往きて焉に居す。今、瑞雲寺と改めたり。

・昔賢如此 原文は昔賢知此

・牛車之量 牛車は大乗を意味する。法華経譬喻品に見える。

・所天 父親。

・鵝 中国では白鳥を言つ。

・利涉 易需「需有孚、光亨、貞吉、利涉大川」

師、時有つて相を表して法を現じ、徒に證理の遲疾を示せり。此の中四對八相あり。

此の相なる者は所依涅槃の相なり。亦た理佛性相と名づく。群生と衆聖と皆な此の相に依る。相は異ならずと雖も迷悟同じからず。故に凡夫有り、聖有り。謂らく、此の相を識る者を名づけて聖人と爲し、此の相に迷つ者を名づけて凡流と爲す。是の故に龍樹、南印度に在りて則ち説法を爲せしとき、諸の衆に對して異相を現じ、身は月輪の坐上に當るが如くして、唯だ法を説くを聞くのみにして其の形を見ざりき。

彼の衆中に一長者有り。名づけて提婆と曰う。諸の衆に謂いて曰く、此の瑞を識るや、と。衆曰く、其の長聖に非ざれば誰か能く辯ぜん、と。尅の時提婆、心根宿に靜にして亦た<sup>ひと</sup>相を見るや默然として契會せり。乃ち衆に告げて曰く、今の此の瑞なる者は師、佛性を現するなり。師の身に非ざる者は無相三昧なればなり。形、満月の如くなるは佛性の義なり、と。語猶お未だ訖らざるに、師、本身を現ぜり。座上に偈ありて曰く、身は圓月の相を現じて、以て諸佛の躰を表す。法を説くに其の形無く、辯を用うるも聲色に非ず、と。

若し人有りて、此の月輪相を將<sup>お</sup>ち來たり問わば、相の中心に牛の字を著<sup>お</sup>きて對す。

・群生衆生皆依此相 原文には群の字の上に与の字がある。

牛 此の相なる者は、牛の忍草を食う相なり。亦た見性成佛相と名づく。何を以ての故ぞ。經に云く、雪山に草有り、名づけて忍

辱と為す。牛若し食らわば則ち醍醐を出だす、と。又云く、衆生若し能く聴受して大涅槃を諮啓せば則ち佛性を見る、と、故に當に知るべし。草は妙法に喩え、牛は頓機に喩え、醍醐は佛に喩う。是くの如ければ則ち牛若し草を食らわば則ち醍醐を出だし、人若し法を解せば則ち正覺を成す。故に云う、牛の忍草を食うの相、亦た見性成佛の相と名づく、と。

・經云 涅槃經二十七。

犇 此の相なる者は三乘の空を求むるの相なり。何を以ての故ぞ。三乘の人真空を説くを聞きて、心の趣向する有るも未だ真空に證入せず。故に圓相下に三牛を畫く。若し此の相を將ち來たり問わば、漸次見性成佛の相を以て之に對す。

牛 此の相なる者は露地白牛の相なり。謂く、露地なる者は佛地なり。亦た第一義空と名づく。白牛なる者は法身を諮るの妙義なり。是の故に一牛の圓に入るの相を表す。

問う、何故に月輪相下に三獸を著くや。又た月輪相の中心に牛の字を著きて之に對するや。

答う、月輪相下の三獸は是れ三乘を表す。月輪相の中心の一牛は是れ一乘を表す。是の故に權乘を挙げ來たつて實入證を現じて之に對するなり。

問う、向前已に、月輪相の中心に牛を著く。是れ牛の忍草を食う相なりと説けり。何が故に又た月輪相の中心に牛を著く者を露地の白牛相なりと言つや。兩處皆な是れ同相同牛なるに何が故に文を説くこと同じからざるや。

答う、文を説くこと別なりと雖も、相及び牛は則ち異ならず。

問う、若也もし異ならざれば何が故に兩處に各おの同相同牛を現するや。

答う、相及び牛は則ち異ならずと雖も、見性の遲疾同じからず。故に兩處に各おの同相同牛を現ぜり。

問う、若し見性の遅疾各別の異なることを論ずれば、忍草を食う牛と露地の白牛と、誰か遅く誰か疾き。

答う、忍草を食う牛は則ち花嚴會中頓見實性の牛を明かす、故に疾し。露地の白牛は則ち法華會中會三歸一の牛を明かす、故に遅し。故に文を説くこと同じからずと雖<sup>いへど</sup>則も、理を證することは異ならず、故に同相同牛を挙げて理智の異ならざることを明かす。來處全く同じと言わざるなり。

・故遲 原文は故是、今改む。

・來處 牛の來處。

牛 此の相なる者は、果に契いて因を修するの相なり。何を以ての故ぞ。初発心住、正覺を成すと雖も而を衆行を碍げず。慧は佛地に等しきも行は位を過ぎざればなり。故に此の相を表す。古人云く、如來所行の跡を履踐す、と。則ち此の相なり。

若し人有つて此の相を將ち來たりて問わば又た月輪相を作りて中心に卍字を著きて之に對す。

・古人 統高僧伝十六法懺章「此經諸仏所行之跡、貧道履而行之」。

卍 此の相なる者は、因圓かにして果滿つるの相なり。

問う、何が故に月輪相の上頭に牛の字を著き來たらば、月輪相の中心に卍字を著きて之に對するや。

答う、月輪相の上頭に牛を著く者は果に契いて因を修するの相なり。月輪相の中心に卍字を著く者は、因圓かにして果滿つるの相なり。因を舉し來たるに果を現じて之に對えたるなり。

牛 此の相なる者は、空を求めて精行するの相なり。門前の草庵、菩薩空を求むるを謂う、故に經に云く、三僧祇、菩薩行を修して、忍び難きを能く忍び、行じ難きを能く行じ、求心歇まず、と。故に此の相を表すなり。

若し人有つて此の相を將ち來たりて問わば、月輪相の中心に王の字を著きて之に對す。

王 此の相なる者は、漸く實際を證するの相なり。何を以ての故ぞ。若し菩薩有つて、劫を経て修行し、四魔の賊を壞して始めて無漏の眞智を得て佛地に證入し、更に餘習の阻む所無きこと、聖王の群賊を降伏して國界安寧にして更に怨賊の阻む所無きに似たり。故に此の相を表す。

・餘習所阻 原文は所恒。

・怨賊所阻 原文は所恒。

此の下の兩對四相は虚を遣りて實を指す。

牛<sup>ノ</sup> 此の相なる者は想解もて教を遣るの相なり。謂く、若し人有つて佛所説の一乘の普法に依りて善く能く討尋し、善く能く解脫して實に錯謬せず。而も自己の理智を了せざれば全く他人の所説に依る。故に此の相を表すなり。

若し人有つて此の相を將<sup>も</sup>ち來たりて問わば、則ち上頭の牛字を祛つて之に對す。

人 此の相なる者は、識本還源の相なり。經に云く、神を廻らして空窟に住せしめ、調伏し難きを降伏し、魔の所縛を解脫して超然として露地に坐し、識陰般涅槃す、とは即ち此の相なり。

・經云 金剛三昧經第四。

問う、何が故に上頭の牛の字を祛つて、圓相の中心の人の字を祛わざるや。

答う、圓相の中心の人の字なる者は、理智を表す。上頭の牛の字なる者は人の相解を喩う。若し人有つて、教に依りて三藏の教典を分析すと雖も、而も未だ自己の理智を頭らかにせざれば、盡く是れ想解なり。想解生ぜざれば則ち理智現前す。故に上頭の牛の字

を祛つて、圓相の中心の人の字を祛わざるなり。是の故に經に云く、但だ其の病を除きて而も法を除かず、と。

問う、何が故に凡人の教に依りて法を学ぶことを許さざるや。

答う、若し是れ智者、教に依らば、何ぞ識心を用いん。凡人は教に依ること益無し。

問う、諸佛所説の三藏經典に用うる所有りや。

答う、是れ教に依りて悟入することを許さざるならず。教に依る想解は祇だ是れ虚妄のみ。是の故に佛、阿難に告ぐらく、十方如来の十二部經の清淨の妙理、恒河沙の如きを憶持すると雖復も、只だ戲論を益すのみ、と。當に知るべし、教に依る想解は無益なりと。

問う、何が故に教に、佛の教を聞く者は盡く聖果を成すと云うや、又た一毫の善、跡を發して佛に駐す、と云うや。

答う、上根の人に約すれば、教に依りて便ち悟り、直に理智を現じて決定して明了なり。若し下根に約すれば、教に依るも悟らず、想解すること益無し。(しかれども)此の下根の人、教に依りて種に勲じ、後世を待つ者は誰か益無しと言わん。佛の教を聞く者は盡く聖果を成じ、一毫の善跡を發して佛に駐す。何に況んや廣く經論を学ぶ及び講説する者をや。

・但除其病云々 維摩經五。

・雖復憶持云々 楞嚴經四。

人牛 此の相なる者は、頭に迷いて影を認むるの相なり。何を以ての故ぞ。若し人有つて自己佛及び淨土を了せざれば、他方の佛の淨土を信知し、一心に専ら淨土に往生せんことを求め、見佛聞法の故に善行を勤修し、佛の名号及び淨土の名相を念す。故に此の相を表すなり。志公笑つて云く、即心即佛なることを解せざれば、眞に驢を騎りて驢を覓るに似たり、と。

若し人有つて此の相を將ち來たりて問わば則ち圓相下の牛の字を祛つて之に對す。

・不解即心即佛 大乘讚の四(伝灯録二十九)

人 此の相なる者は影に背きて頭を認むる相なり。

問う、何が故に下頭の牛の字を祛つて、圓相の中心の人の字を祛わざるや。

答う、衆生未だ眞智を發せず、未だ眞空に達せず。故に専ら他方の淨土及び佛を求め、淨土に往生し、見佛聞法せんとす。衆生若し迴光して智を發し、眞空に達得せば、自己佛及び淨土一時に齎しく現れ、心外の淨土と佛とを求めざらん。故に圓相の中心の人の字を祛わず。下の牛の字を祛いたるなり。

問う、如何なるか是れ自己佛及び自己の淨土なる。

答う、衆生若し眞智を發し、眞空に達得すれば、即ち眞智是れ佛にして、眞空是れ淨土なり。若し能く是くの如く躰會せば、何れの處にか更に他方の淨土及び佛を求めん。是の故に經に云く、持佛の佛を聞くを將てするよりは何ぞ自聞にして聞かざるや、と。

・眞空是淨土 原文には眞の字がない。

又た此の下に四對五相あり。

Ｃ 此の相なる者は函を挙げて蓋を索むるの相、亦た半月待圓相と名づく。若し人有つて此の相を將ち來たりて問わば、更に半月を添えて之に對す。此れは則ち問者函を挙げて蓋を索め、答者蓋を將つて函に著く。函蓋相い稱う。故に已に圓月相を現ぜるなり。圓相は則ち諸佛の躰を表すなり。

此の相なる者は、玉を把つて契を覓むるの相なり。若し人有つて此の相を將つて來たり問わば、圓月の中心に某を著きて之に對す。此れは則ち問者玉を把つて契を覓む。故に答者珠を識して便ち下手す。

△ 此の相なる者は、鈎(原作釣、下同)入りて續ぐことを求むるの相なり。若し人有つて此の相を將ち来たりて問わば某字の辺に人の字を添著して之に對す。此れは則ち問者鈎入りて續ぐことを索む。故に答(者)續ぎて寶器を成すなり。

佛 此の相なる者は已に寶器を成ぜし相なり。若し人有つて此の相を將ち来たりて問わば、又た圓月相の中心に土の字を著きて之に對す。

・圓相中の佛の字は、仏の字であるべきである。

± 此の相なる者は玄かに旨を印せる相なり。迥然として前現の衆相に超え、更に教意の攝する所に属せず。若し人有つて對面して付するも果然として見ず。故に三祖云く、毫釐も錯つ有らば天地玄かに隔る、と。然れども玄かに之を會する無からずんば、誰か能く此の相を識せん。若是其の人ならば見て諳に會すること子期の百牙の琴を聴き、提婆の龍樹の相を見るが如くす。是れ其の人ならずんば、對面するも識せざること巴人の白雪の歌を聞き、鶯子の浄名の會に入るが如くす。假使(たと)後學なりとも根機玄利ならば是れを將てすれば則ち頓に暁ること鶏の卵を抱きて啐啄同時なるが如し。相性遲鈍なる者ならば學びて而も暁ること難きこと盲人の色を相して轉た錯つが如きのみ。

・若有人對面付 原文は若有人似个對面付。

・三祖云 信心銘。

・相性 根性が。

・然不無玄會之 こうしか読めないが意味不明。「不無」で仮定になることはない。

師、時有つて三遍成佛篇を説けり、中に於いて三意有り。云何んが三と為す。一者は證理成佛、二者は行滿成佛、三者は示顯成佛



なり。

證理成佛と言つ者は、知識の言下に光を廻らして返つて自己の心原の本より無一物なるを照らして便ち是れ成佛す。萬行よりして漸漸にして證せず。故に證理成佛と云う。是の故に經に云う、初發心の時便ち正覺を成ず、と。又た古人云く、佛道遠からず、心を廻らせば即ち是れなりとは即ち此の義なり。

此の證理成佛中に、若し體性を説かば都べて一物無し。通じて三身を論すれば一佛に菩薩無からず。三人有りとも雖も而も今見性成佛せり。故に成佛することを得るの功は文殊に在り。故に古人云く、文殊は是れ諸佛の母なり。謂つ所は諸佛は文殊より生ずるが故に、と。文殊と言つ者は即ち實智なり。一切諸佛、其の實智に因りて菩提を證す。是の故に文殊は是れ諸佛の母なるのみ。

・心地觀經三「文殊師利大聖尊、三世諸仏以為母」。

行滿成佛と言つ者は、已に其の真理を窮むると雖も而も普賢行願に順じて位を歴して廣く菩薩の道を修む。所行周備し、悲智圓満す。故に行滿成佛と云うなり。故に古人云く、行き到りし處即ち是れ從り來たりし處なりと。是の故に明らかに知る、所行已に周なれば還た本處に至る、と。本處なる者は即ち理なり。

此の行滿成佛所證の理は、前の證理成佛の理に異ならず。理は異ならずと雖も、因を行じて果に至る。故に行滿成佛と云うなり。此の行滿成佛中、若し果徳を拏ぐれば、但だ普賢行を以て佛道を成ず。三身を論ずれば亦た一佛二菩薩有り。三人有りとも雖も而も今別に行滿成佛を取る。故に古人云く、普賢は是れ諸佛の父なり。謂つ所は諸佛は普賢より生ずるが故に、と。普賢と言つ者は即ち萬行なり。一切諸佛、其の萬行に因りて菩提を證す。是の故に普賢は是れ諸佛の父のみ。

一佛二菩薩と言つ者は、遮那は是れ理。文殊は是れ智。普賢は是れ行なり。此の理智行三人同體なり。故に一も捨つ可からず。又た一佛二菩薩は互いに主伴と為る。本體無上を以て遮那を主と為し、見性智功を以て文殊を主と為し、萬行福力を以て普賢を主と為

す。是の故に、李通玄云く、一切諸佛は皆な文殊、普賢の二大士を以て佛の菩提を成ず、と。又た云く、文殊普賢は諸佛の為に少男と長子と作るな、と。故に知んぬ、三人互いに主伴と為ると。

示顯成佛と言ふ者は、前の證理行滿の如く、自ら行じて成佛すること已に畢り、今、衆生の為に成佛を示顯し、八相もて成道す。八相という者は、兜離たうり天より退きて入胎、住胎、出胎、出家、成道、轉法輪、入涅槃する等の八相もて成佛するなり。故に云く、示顯成佛と。當に知るべし八相成道なり。是れ報化にして眞に非ず。是の故に經に云く、如来出世せず亦た涅槃有ること無し。本願力を以ての故に自在の法を示顯す、と。此の經は報化佛中眞佛を指すなり。又た經に云く、吾れ成佛して従り已來、無量阿僧祇劫を経たり、と。故に知んぬ、釈迦如来は無量劫前、已に行滿大覺を成じて而も衆生の為の故に始成正覺を示顯す、と。

今、此の釈迦は是れ賢劫千佛の中第四佛なり。過去莊嚴劫中一千佛、現在賢劫中一千佛、未來星宿劫中一千佛。是の如き三劫中一切諸佛、世に出現し、群生を攝化す。相傳えて授記し、分毫も錯たず。教典を觀くわん原作歎くわん看し、古跡を推尋し、一人の成佛の方様を通觀するに、應に知るべし三遍成佛なるのみを。

伏して請う、佛位を歷り原作磨りせんと欲する者は、略は筌蹄を看て却つて自ら思惟せよ。前佛跡佛皆な此の路を同じくす。人の路を行きて新舊同轍なるが如し。故記而之也（？）

師、時有つて三篇を説く。中に於いて三意有り、第一、頓證實際篇、第二、迴漸證實際篇、第三、漸證實際篇。

廣野中に一仙人有り。名づけて該通と曰う、大衆の為に説くらく、若し衆生有つて無始より已來、性地を悟らずんば、三界に輪廻し、縁に随つて報を受く。忽ち智者の眞教を演説するに遇い、頓に性地を悟らば便ち正覺を成じて漸次に依らず、故に名づけて頓に實際を證すと為す。是の故に經に云く、雪山に草有り、名づけて忍辱と曰う。牛若し食らわば即ち醍醐を出す、と。是れ其の意なり、

と。

・經云 涅槃經二十七。

衆中に一隱士有り、名づけて智通と曰う。仙人に啓して曰く、群品に自ら性地有ること、又た一切智者、眞教を演説して一人の爲めにせざることを信知す。何を以ての故に同じく眞教を聞きて悟ると悟らざると各各同じからざるや。

仙人、隱士に告げて言く、衆生に自性清淨なる圓明の躰有りと雖も、本に背きて末を遂い、多劫多時に別異の身を受け、根性の利鈍等しからず。故に同じく眞教を聞くも悟ると悟らざると各各同じからず。是れ智者眞教を説くことの過(原作禍)ならず。故に經に云く、猶お明淨の日の瞽者能く見ること莫きが如し。智慧心有ること無くんば終に見ること能わず、と。

・經云 不明。

隱士、仙人に啓して曰く、高指を諦觀し、且つ來言を尋ぬるに、智者説法して一人の爲にせざるも悟ると悟らざるとは唯だ愚と智とに在り。然らば則ち愚智は本来各各同じからざらん。説法に何の用つるところか有らん。

仙人隱士に告げて言く、汝今諦聽せよ、吾れ汝の爲に説かん。智人は是れ本より悟らず、愚人は是れ長には迷わず。愚人忽ち眞説を悟らば智人は是れ外より來たらず。若也眞教を用いざれば愚は争でか智人と成らん、若也眞教を用いざれば何れの處にか利鈍を辯じ得ん。是の故に衆生若し是れ根鈍ならば再び眞教を聞くも性地を曉らじ、衆生若し是れ利根ならば、忽ち眞教を聞きて頓に性地を曉らん。便ち是れ智人なり。何れの處にか愚智に隔て有らん。是の故に當に知るべし、凡聖隔てず、根に利鈍有ることを。智者説法して亦た一人の爲にせざること猶お母鷄の卵を抱くが如し。衆卵皆發する糞窠は發せず、可に即ち母鷄唯だ衆卵を愛して糞窠を愛せざるならんや。是れ則ち發すると發せざるとは唯だ卵性に在るのみ。是れ母鷄の卵を抱くの過(原作禍)ならず。

一切智者も亦復た是くの如し。廣く大衆の爲に眞教を演説するに根の利なる者は頓に曉り、根の鈍なる者は曉らず。可に則ち智者

唯だ利根を愛するのみにして鈍根を愛せざるならんや。是れ即ち曉ると曉らざるとは唯だ根性に在るのみにして是れ智者の説教の過（原作禍）ならず。是の故に經に云く、所有あつゆ聞法もんぽうのものは他に由りて悟らず、と。然らば即ち方便を假ることを知る。智者は常に妙法を説き、悟ると悟らざるとは此れ學人に在りて智者には在らず。

・贊讃 不明。

・可即母鷄唯愛卵不愛贊讃 原文には可即母鷄唯不愛卵愛贊讃とある。可即是可是が普通のいい方。

・經云 大乘入楞伽經三「於仏法中、不由他悟」

隱士問つて曰く、衆生若し是れ利根にして忽ち眞教を聞きて言下に慧の發し、頓に性地を悟らば此は是れ何人なるぞ。

仙人答えて曰く、此は是れ智照の文殊なり。

隱士問つて曰く、文殊の智照、何れの處にか在る。

仙人答えて曰く、文殊の智照は是れ性地に在り。

隱士問つて曰く、照智は性地と同異いか若何ん。

仙人答えて曰く、智照は性地と同じからず異ならず。

隱士問つて曰く、智照は性地と同じからず異ならず、其の義如何ん。

仙人答えて曰く、智照は是れ能證の人、性地は是れ所證の法なり。故に能所無からず。是の故に古人云く、此の無知の般若を以て、彼の無相の眞諦を證す、と。故に智は性と同じからず。又た能證に知無く、所證の性に躰無く、能所有らず。是の故に古人云く、知、眞際を窮むれば、能所両ながら亡なず、と。故に知照は性地と異ならず。

隱士智通、仙人の説を聞き、奉じて高指に契い、頓に疑網を決せり。

・古人云以此云々 般若無知論。

・古人云智窮 不明。

・文殊智照是在性地 原文、地は之。

・智照与性地不異 原文、不異の下に照の字あり。

時に于いて該通仙人、大衆の為に説くらく、先に智通の為に已に見性を説けり。若し衆行を論ずれば必ずしも此のくの如からず、と。此の衆中に遊子有り、名づけて行通と曰う。仙人に啓して曰く、見性は此くの如し、衆行若何ん。

仙人、遊子に告げて言く、若し衆生有り、忽ち眞教を聞きて頓に性地を見、此の處に住せずして縁に随つて自利利他の悲智を行す。故に名づけて衆行と為す。

遊子、仙人に啓して曰く、我等曾つて聞く、仙人、法を演説すらく、忽ち眞教を聞きて頓に性地を悟らば名づけて智照文殊と為す、と。今、仙人の説を承るに、頓に性地を悟りて、此の處に住せずして自利利他の悲智を行す。故に名づけて衆行と為す、と。此の行を行ずる者は此は是れ何人なるや。

仙人答えて曰く、此の行を行ずる者は寄位の普賢なり。

遊子問つて曰く、普賢大士、何等の位に寄るや。

仙人答えて言く、因の五位乃至果位に寄る。此の位に寄ると雖も此の位に住せず。衆行行する時、三等の普賢あり。

遊子問つて曰く、因位乃至果位に寄位す。何等を名づけて三等の普賢と為すや。

仙人答えて曰く、一なる者は出纏の普賢、二なる者は入纏の普賢、三なる者は果後の普賢。

遊子問つて曰く、此の三普賢は勝劣等級、其の義如何ん。

仙人答えて言く、此の三普賢は勝劣等級、其の義同じからず。謂く、言つ所の出纏の普賢なる者は、見性の後、衆行を行す。前の万境に對して警起の心無からざるも已に心源に達したれば幻化の境に滞せず。故に古人云く、所断の鄞無からざるも遷た能断の智有

り、と。

遊子問つて曰く、古人云く若し能證の智を發すれば全く所断の障無し、と。其の義如何ん。

答えて曰く、若し能證の智を發すれば全く所断の障無しとは、此は是れ文殊の断惑なり。何を以ての故ぞ、文殊、性に當たるの時、躰中に異相有らざるが故に。今、所断の障無からず、還た能断の智有りと言つは、此は是れ普賢の断惑なり。何を以ての故ぞ。普賢、位を歷するの時、断惑成徳無からざるが故に、是の故に兩人の断惑成徳同じからず。兩人の断惑成徳を會せずして断惑成徳の義を相い諍う。

遊子問つて曰く、已に文殊の断惑は此の如きことを知る。若し普賢の断惑を論ずれば、現行を断するや、習氣を断するや。

仙人答えて言く、若し普賢位中を言わば、全く現行の煩惱無し。普賢奇位の断惑は、此は是れ習氣の煩惱なり。

遊子問つ、現行と習氣とあり、如何にしてか普賢は全く現行の惑無くして、唯だ習氣の障有るのみなるや。

仙人答えて言く、凡夫は境に對して心を起し、前境を識せずして後境に作業す。即ち是れ現行なり。智者は境に對して心を起し、境の虚幻なることを知りて前境に滞らず、習氣の故に。是れ普賢は是れ見性の後に行を行するの人なり。故に全く現行の惑無く、唯だ習氣の障有るのみ。若し習氣の断す可き無くんば何ぞ忍び難きを能く忍ぶことを用いんや。若し悲智成佛無くんば何ぞ行じ難きを能く行することを用いんや。

悲智一門を行すと雖も、所作は躰に依りて行を成ず。是の故に古人云く、所作は皆な性に依り、功德林を修成す。終に寂を取るの意無く、唯だ群を濟つ心の有るのみ。悲を行すれば悲廣大に、智を用うれば智能く深し、他を利し兼ねて自ら利す、少聖詎んぞ能く任ぜん、と。

然らば即ち知んぬ、出纏の普賢は悲智を衆行して躰に依りて修行す。又た細説すれば、普賢の衆行は即ち行布圖融して齊しく現じ、断惑成徳俱に有り。自利他雙ながら修し、智門悲門並びに成ず。

行を言つや、繁く大用を興して、起れば必ず眞を全つす。行相を言つや、依位の断惑無からず、位高ければ則ち習氣漸く薄すく、行廣ければ則ち悲智増す深し。十住より乃至十地に至りて出纏の菩提已に満てり。

・繁興大用 華嚴金師子章の句。

言つ所の入纏の普賢なる者は、一切の群品中に類を同じうするの大悲是れなり。

前の出纏の普賢は、位中に廣く悲智を行じて自利利他行す。故に断惑成徳の功無からず。断惑成徳の功ありて出纏已に満つると雖も而も出纏無患の處に住せず。故に四生六趣に於いて廣く大悲を行じ、類を同じうして物を化す、之れ入纏の普賢と名づく。

此の入纏化物の徳と前の出纏成行の功と、二心功齋して平等なり。故に名づけて等覺と為す。悲智圓滿す、故に名づけて等覺と為す。出纏入纏を取らず、大智大悲を取らず、故に名づけて妙覺と為す。悲智と出纏入纏を取らずと雖も、若し果徳を論ずれば、行として取らざるは無く、位として収めざるは無きなり。

・不住出纏無患之處 原文不住は不信。

・同類化物 原文は同断化物。

言つ所の果後の普賢なる者は、遍行三昧是れなり。謂く、妙覺位中出纏入纏大智大悲を取らずと雖も、而も此に住せず、還た出纏入纏大智大悲に向いて逆順縱横、諸の位中に於いて類を同じうし心を同じうするも亦た定めて位を守らず、隨縁任運、廣く大悲を作す。諸類中に於いて何の位か定めて受けざらん。能作能受に於いて作さず受けず、故に名づけて果後の普賢と為すなり。若し定めて此の人の所行を取らば、未だ此の人の行處を會せざるなり。

・妙覺位中雖不取出纏入纏大智大悲 原文に入纏なし。

言つ所の三等の普賢なる者は是れ三人ならず、一人行を行ずるとき行の勝劣大義に依りて三等の普賢あり。

言つ所の一人なる者は初めて頓に實際を證するの時は即ち文殊なり。今、縁に随つて行を行ずるの時は即ち普賢なり。故に名づけて一人と為すなり。此は是れ通じて内證外化を取るなり。

若し内證外化不同を以てすれば故より文殊普賢の兩人なり。若し通じて能證所證を取ると及び衆行の不同とを以てすれば、即ち三人と為すなり。

此れ大教の意説なり。謂く、大経題して大方廣と云う者は所説の法なり。故に即ち遮那是れなり、佛なる者は能證の人なり。故に即ち文殊是れなり。花嚴なる者は隨縁の行なり、故に普賢是れなり。此れ且く一佛一菩薩にして即ち三人と為すなり。

若し普賢行を修行せんと欲すれば先ず眞理を窮め、縁に随つて行を行ぜよ。即ち今行と古跡と相應すること、門を閉じて車を作るに、門を出ずれば轍を合するが如似ごとからんのみ。

## 廻漸證實際篇第二

時に該通仙人、大衆の爲めに法を説く、若し衆生有り無始より已來性地を悟らず、三界に輪廻して三乗の漸教を聞きて三乗の法を悟らん。三界の患の故に三乗有り、此の人忽ち眞経を聞き、廻りて妙恵を成ぜん。實際を窮證す、故に名づけて廻漸證實際と為すなり。是の故に古人云く、門前の三駕車は是れ權乘、露地の白牛にして方めて明らかに實證す、とは即ち其の意なり。

隱士智通、仙人に啓して曰く、此の廻漸證實際の者は、彼の頓證實際の人と同異如何ん。

仙人答えて曰く、先に已に三乗に落つると雖も、三乗に在らず、故に來處よ玄かに殊なる。而も今、漸を廻らして實際を證す。故に彼の頓證實際の者と異ならず。是の故に古人云く、百川大海に歸すれば百川の名無く、三乗一乗に歸すれば三乗の名無きなり、と。然らば即ち知んぬ、此の廻漸證實際の人は、彼の頓證の人と異ならざることを。愁つる莫かれ、廻漸は頓證と同じきか異なれるかを、自ら隨縁の心を廻らして還つて實際の理を照せよ。



・三界患故有三乘 割注と見なすべきである。新華嚴經論に「門前三車、對三界苦、且令離火宅所燒、權免火難」とあるのを参照。

・此人忽聞眞教 原文は人此云々。

・雖先已落三乘、不在三乘 不在の上に今の字を補う。

隱士智通、眞説を奉領して寂然として言無し。

時に遊子行通、仙人に啓して曰く、我等曾つて仙人の演説を聞くに、若し衆生有り、頓に性地を證悟し此の處に住せずして縁に隨つて行を行ずるを名づけて衆行と爲す。此の行を行ずる者名づけて普賢と爲す、と。今此の廻漸證實の後、人の衆行を行ずる有りや、人の衆行を行ずる無きや。

仙人答えて曰く、衆行を行ずる者無からず。所以の者は何ぞ。廻漸證實の者は即ち露地の白牛なり、故に白牛運轉して露地に住せず。故に衆行を行ずる人無からず。

言う所の露地の白牛なる者は、露地は是れ所證の法、故に即ち遮那是れなり。白牛は是れ能證の人、故に即ち是れ文殊是れなり。白牛運轉して此の處に住せず、故に即ち普賢是れなり。普賢の所行は即ち是れ衆行なり。

二篇の大意此くの如し、汝自ら諦觀せば、同異自ら看んのみ。

### 漸證實際篇第三

時に該通仙人、大衆の爲めに説く、若し衆生有り、無始より已來、性地を悟らず、三界に輪廻して縁に隨つて報を受く、忽ち漸教を聞きて信解漸く發し、因の六位に寄りて三祇劫を終、難忍能忍、難行能行、斷惑成徳して始めて無露の眞智を得て法身を露現す、故に名づけて漸證實際と名づく。是の故に古人云く、信根、一念を生ずれば、諸佛盡く應に知るべし。因を此の日に修して果を未來の

時に證す、三大僧祇劫、六度久しく安施し、無漏の種を薰成して、方めて不思議と号す、と。是れ其の意なり。

時に隱士智通、仙人に啓して曰く、今の此の漸證實際の人は、頓悟實際の人と同異如何ん。

仙人、隱士に告げて言く、漸頓不同なりと雖も而も終歸は一なるのみ。所以の者は何ぞ。小川、海に歸して全く同一味なり。漸解して源に歸る、豈に兩般有らんや、故に漸頓、異なると雖も源に歸らば二無きのみ。

隱士智通、仙人の教を奉じて異解を生ぜず、身を退けて默然たり。

時に遊子行通、仙人に啓して曰く、前篇中に於いて仙人の説を聞くに、頓證實際、後に行人有り。此の篇に明らむる所の漸證實際の者、漸證實際已後に行人有りや。

仙人答えて曰く、行を行ずること無からずと雖も、前篇に明らむる所の者に同じからず。頓證實際已後、位に随つて行ずる時は出纏入纏乃至果後の三等普賢行なり。今の此の漸證實際篇の意なる者は、漸教方便に依りて三僧祇を経て菩薩行を修し、始めて無漏の眞智を得、此の無漏の眞智を以て法身を露現す、故に名づけて漸證實際と為す。漸證實際の已後、行を行ずること無からずと雖も、而も全く等級に依位するが故に是の故に前篇に明かす所に同じからず。

遊子問つて曰く、曾つて聞く、前の兩篇中に能證の人、所證の法、乃至隨緣行の人に各各名有ることを明かせり。此の篇中還た能證所證及び隨緣行の人の名有りや、請つ、為めに指出せよ。

仙人答えて曰く、能證所證及び隨緣行の人の名無からざるなり、謂く、能證の人なる者は即ち是れ無漏の眞智、亦た報身佛是なり。所證の法なる者は即ち是れ實際、亦た法身佛と名づくる是なり。行の人は即ち是れ無漏の眞智ありて果位を守らず、隨緣して物を利す、名づけて行人と為す、亦た化身佛と名づくる是なり。

和尚は享年六十五にして遷化せり。了悟禪師眞原の塔と謚号す。

米和尚、襄州王敬初常侍に嗣ぐ、西京に在り、未だ行録を觀ず、氏族を窮むる莫し。

師、因みに僧をして仰山に問わしむ、今時還た悟ることを假るや。仰山云く、悟ることは則ち無からざるも、第二頭に落つることを爭奈何んせん。師、之を肯えり。

老宿有り、師を屈して齋せしむ。師来るに座位に排せず。老宿、一辺に在りて坐せり。師便ち座具を展べて老宿を礼拝せり。老宿便ち起つ。師便ち坐す。老宿都べて聲を作さず、乃ち席を地上に展べて坐せり。

夜間に到りて衆に告げて曰く、他家若し佛法中に在りて用心せば、三日にして便ち合に見るべし。若し見ざれば則ち知らず。師、三日の後に到りて来たり云く、前日、賊に著れり。

僧、鏡清に問う、米和尚廻りし意如何ん。云く、只だ錐頭の利きを見るのみにして、鑿頭の平らかなるを見ず。

ある老宿が師を齋座に招いた。師はやって来たのにしかるべき席に案内されなかつた。老宿がかたへに坐していた。師はすと座具をのべて老宿を礼拝する。老宿はつと立ちあがる。師はすると老宿の座に坐る。老宿は一声もたえずに地面にごさをしいて坐つた。

夜になつて、老宿は修行僧に告げて云つた、やつこさんがもし仏法中に用心しているのなら三日たてば現れるはずだ、もし現れなければ知つたことではない。

師は三日たつて後、やつて来て云つた、前日は賊したたかな者にしてやられた。

僧が鏡清に問う、米和尚がもどつたのはどういふつもりですか。鏡清が云う、キリの先のするどさを見ていただけで、ノミの先のするどさを見ていない。

・只見錐頭利云々 麗居士語録に「只見錐頭利、不見鑿方」というのが見える。今は米和尚を評したもの。

・この一段は、伝灯録九、金州操禅師のところに出ている。

臨濟、師に問う、十二面観音は豈に是れ聖ならずや。師云く、是なり。作摩生か是れ本来の面。臨濟一搥す。師云く、長老且らく寛う寛う。濟側掌す。

- ・作摩生は本来面 臨濟の語であるべきところ、とすれば師の答が脱落していることになる。
- ・側掌 どういう動作か不明。

師、受業寺に帰る。老宿有りて問う、月中に井索を断ち、時人喚んで蛇と作す。未審し吾が師、喚んで甚摩とか作す。師云く、若し佛見有らば則ち衆生見に同ず。其の老宿云く、千年の桃核。

- ・月中断井索 わかりにくい語だが、要するに「繩の断片」が問題とされているのであろう。
- ・未審吾師喚作甚摩 伝灯録では未審七師見佛喚作什麼となつている。
- ・千年挑核 千年もの劫を経てカチカチになつた桃のさね。手のつけられぬ硬直した教条主義を喩える。

實壽和尚、臨濟に嗣ぐ、師諱は沼、鎮州に在り、未だ行録を觀ず、化縁の終始を決せず。

師、胡釘鉸に問う、解く釘鉸すと説くを見る、是なりや。對えて曰く、是なり。師曰く、還た虚空を釘鉸し得るや。對えて曰く、請う、和尚、打破し將ち来たれ。師便ち之を打つ。對えて曰く、錯つてム甲を打つこと莫れ。師云く、向後、多口の阿師有りて汝が与に點破せん。

人有つて趙州に拳似せり。趙州云く、只だ者の一縫すら尚お奈何んともせず。

東山、第一に代わって云う、若し是れ某甲の手裏ならば阿那个の縫か閉して釘せざらん。

師がいかけ屋の胡なにがしに問う、いかげができるってほんとうかい。答えて云う、そうです。師が云う、虚空をいけることができるか。答えて云う、どうか和尚さん、ひび入れてもって来て下さい。師はこれを打つ。答えて云う、間違っつてわたしにひび入れてもらつては困ります。師が云う、これから先、おしゃべりの坊さんがお前のために種あかしするだらう。

ある人が趙州にこの話をした。趙州が云う、たったこの一つのひびさえどうしようもないでいる。

東山が第一に代わつて云う、もしわたしの手のうちにあるならば、どのひびわれがかけられないことがありません。

・多口阿師 卷四薬山の伝に「師書一佛字、問道吾是什摩字。吾曰、是佛字。師曰、咄、這多口阿師。千佛代叉手退後立。又代薬山第二機曰、錯」。

・東山代第一云 前引の文から推すと、東山は胡釘鉸の第一機に代わつたものである。

師初めて開堂せし時、三聖、一僧を推し出せり。師便ち之を打つ。三聖云く、長老与摩に人を讒弁す。鎮州城裏の人の眼を瞎却し去らん。

師が初めて開堂した時、三聖が一人の僧を師の面前に押し出した。と、師は僧を打つた。三聖が云う、和尚さん、そんな人の見分け方では鎮州城の人の眼をつぶしてしまふことになりませぬ。

・瞎却鎮州城裏人眼去在 在は句末の強辞。

灌溪和尚、林済に嗣ぐ、潭州に在り、師諱は志閑、未だ行録を覩ざれば化縁の始終を決せず。

後道吾、師に参じて礼拝せず、便ち問う、什摩生そもさん。師云く、無位。吾云く、与摩ならば則ち空に同じ去るなり。師云く、咄、この屠兒。吾云く、生の殺す可き有らば則ち倦まず。

後道吾が師に参じて、礼拝せずに問うた、いかがですか。師が云う、無位だ。吾が云う、そういうことなら虚空と同じことになりますね。師が云う、咄、豚ころしめ。吾が云う、殺すべき生き物があるかぎり倦くことはありません。

師、末山師姑の處に到る。師姑問う、什摩處いすこより来たる。師云く、露口より来たる。師姑云く、何ぞ盖覆せざる。師却って問う、如何なるか是れ末山。師姑云く、頂を露わさず。進んで曰く、如何なるか是れ末山中の人。姑云く、男に非ず、女相に非ず。進んで曰く、還た変するや。姑云く、是れ鬼神ならず、什摩にか変せん。師、之を肯えり。

師は末山師姑のところへやって来た。師姑が問う、どこからおいでたか。師が云う、野ざらしの関所から来た。師姑が云う、どうしておおわないのですか。今度は師が問う、どのようなのが末山ですか。師姑が云う、頂を露わにしません。進んで云う、どのようなのが末山中の人ですか。師姑が云う、男でもなければ女でもありません。進んで云う、変わりますか。姑が云う、鬼神でもないのに何に変わりましたか。師はこれを肯った。

・還変也無 竜女成佛の故事をふまえたもの。

洞山、夾山に問う、作摩生。對えて云く、只だ与摩。洞山、之を肯えり。人有って師に拳似せり。師云く、金もて金を打し、水もて水を洗つ。雲門拈じて僧に問う、作摩生か是れ金もて金を打し、水もて水を洗つ。僧云く、餠餅を喫せり。与摩に道つ、還た得たりや。僧云く、槌し了れり、鬧すること莫れ。雲門、之を肯えり。

洞山が夾山に問う、どうだ。答えて云う、ただそのようにしているのみ。洞山はこれを肯った。  
ある人が師に拳似した。師が云う、金で金を作り、水で水を洗つ。

雲門が拈じて僧に問う、どういのが金で金を作り、水で水を洗うことか。僧が云う、餠餅を食べました。雲門が云う、そのように云ってそれでよいのか。僧が云う、白糖しおわった、さわがしくしてはならない。雲門はこれを肯った。

・只与摩 原文には摩の字がない。

・喫餠餅 碧巖七十七則雲門餠餅「僧問雲門、如何是超佛越祖之談、門云、餠餅」。

問う、如何なるか是れ不傷の句。師云く、満口に道いて觸おかさず。

・不傷句 何をばふせてある。言葉で云えないことを言葉で云うことは傷つけることになるということが前提になっている。

師初め灌溪山に住し、次いで嶽麓に化す。毎に一言有り、五陰山中古佛堂あり、毗盧、晝夜、圓光を放つ、と。

嶽麓山に塔せり。

・宗鏡録九八「五陰山中古仏堂、毗盧晝夜放円光、箇中若了非同異、即是華嚴徧十方」。

興化和尚、林済に嗣ぐ、魏府に在り、師諱は存獎、未だ行録を覩ざれば、終始を決する莫し。廣済大師通叔の塔と勅謚す。

師、僧に問う、什摩いすこ處より来たる。對えて云く、崔禪師の處より来たれり。師云く、還た喝を將ち得来たるや。對えて云く、將ち来たらず。師云く、与摩いすこならば則ち崔禪師の處より来たらず。僧便ち喝す。師便ち棒もて打す。

師が僧に問う、どこから来たか。答えて云う、崔禪師のところから来ました。師が云う、一喝をもつて来たか。答えて云う、もつて来ておりません。師が云う、そついつことなら崔禪師のところから来たのではない。僧が一喝する。師は棒で打つ。

・崔禪師 伝灯録十二定州善崔禪師。

師、又の時に僧を喚べり。應諾せり。師云く、點するときは則ち到らず。又別僧を喚ぶ。僧云く、作摩。師云く、到るときは則ち點せず。

師は別の時に僧を呼んだ。僧がはいと返事をする。師が云う、(用を)いつけるときにはやっこない。また別の僧を呼ぶ。僧が云う、どうしようというのです。師が云う、やって来た時には用を(い)いつけていない。

問う、國師、侍者を喚ぶ、意什摩生。師云く、一言、衆盲を引く。

怡山拈じて衆に問う、什摩處いすこか是れ國師言いし處。自ら代わって云く、他家は甚摩をか欠少せる。

問う、國師が侍者を呼んだのは、どういう意味ですか。師が云う、一人の盲者が多くの盲者を引きつれている。

怡山が拈じて修行僧達に問う、どこが國師の言いいたところか。自ら代わって云う、かれがなにを欠いているというのか。

・無門関第十七。國師三喚侍者、侍者三應。國師云、將謂吾辜負汝、元來却是汝辜負吾。

同光帝、師に問う、咲、昨来河南に一個の寶珠を取得せり。人の價を著くる無し。師云く、請皇帝寶珠看。帝、両手を以て幞頭の門を撥開す。師云く、皇帝は是れ万代の寶珠、誰か敢えて價を著けんや。

・請皇帝寶珠看 どうか宝珠をお示し下さいの意であろうが、何か字が脱落しているであろう。請出皇帝寶珠看のハシヨッタ云い方。

後魯祖和尚、灌溪に嗣ぐ、鄧州に在り。



問う、如何なるか是れ雙林樹。師云く、有相身中の無相身。進んで曰く、如何なるか是れ無相身。師云く、金香炉下の鐵崑崙。

・金香炉下鉄崑崙 黄金の重い香炉の台座に造形されている崑崙奴力強い黒人の奴隷。ものを言うことなく万象を支えているものの象徴。

問う、如何なるか是れ高峯獨宿底の人。師云く、夜半に日頭明らかに、午時に三更を打す。

問う、格別の事如何ん。師云く、化道、縁終りし後、虚空更に那邊ぞ。

僧問う、無門に進向する時如何ん。師云く、太鈍生。進んで曰く、是れ鈍生ならずして直下に無門に進向する時如何ん。師云く、靈機は未だ曾つて辺際を論ぜず、法に執するは元來暗中に在り。

問う、如何なるか是れ學人著力の處。云く、春來たりて草自ら青み、日上りて已に天明らかなり。進んで曰く、如何なるか是れ不著力の處。云く、山頭、石崩落し、平川、火を焼きて行く。

・平川 川ぞいの平原。

隱山和尚、洞山行脚せし時、路に迷つて山に入り、恰も師の處に到れり。師問う、此の山に路無し、什摩處いすこよりか來たれる。對えて云く、來處は則ち無からず。和尚は什摩處よりか此の山に入れる。隱山云く、我は雲水より來たらず。和尚はれ先に住するか、此の山はれ先に住するか。云く、知らず。和尚、什摩と為してか知らざる。云く、春秋到來せず。

洞山便ち問う、如何なるか是れ贖中の主。云く、白雲、青山を蓋う。如何なるか是れ主中の主。長年戸を出でず。贖主相い去るこ

と幾何ぞ。云く、長江水上の波。賣主相見す、何の言説か有る。云く、清風、白月を拂つ。又た偈ありて曰く、青山は白雲の父、白雲は青山の兒、白雲終日依るも、青山は都て知らず。此中の意を知らんと欲すれば、寸歩も相い離れず。

洞山、此れに因りて頌して曰く、道に心の人に合する無く、人に心の道に合する無し。此中の意を知らんと欲すれば、一は老いて一は老いず。

此れに因りて龍牙大師、頌を造りて曰く、心空は道空の安きに及ばざるも、道と心との空は状一般なり。参玄は是れ道空の士ならずんば、一たび乍ち相い逢つても看ること易からず。

此れに因りて曹山大師、頌を作りて曰く、今年田熟せざれば、来年種つるに期有り。他の年少の父を愛せんには、須らく白頭の兒を得べし。

隠山和尚、洞山が行脚していたとき路に迷つて山に入り、あたかも師の所へやって来た。師が問う、この山には路がないが、どこからおいでたか。答えて云う、来処がないわけではありません。和尚さんはどこからこの山に入られたのですか。隠山が云う、わしは雲や水に従つて来たのではない。和尚さんが先に住んでいられるのですか、この山が先にあるのですか。云う、知らん。和尚さんどうして知らないのですか。云う、ここには季節がないからだ。

そこで洞山が問う、どのようなのが賣中の主ですか。云う、白雲が青山を蓋つ。どのようなのが主中の主ですか。云う、長年、門戸を出ない。賣と主とはどれくらい離れていますか。云う、長江に水上の波がある。賣と主と相いまみえてどういうことをはなすのですか。云う、清風が白月をはらう。

また偈を作つて云う、青山は白雲の父、白雲は青山の兒。白雲が終日よりかかつていても、青山はまったく知らない。こここのころが知りたいとなら、寸歩も離れてはいないということだ。

洞山はこれにちなんだ頌を作つて云う、道には人に合しようとする心はなく、人にも道に合しようとする心はない。こここのころが知りたいとなら、一人は老い一人は老いずということだ。

これにちなんで龍牙大師が頌を作つて云う、心空は道空の安穩なおよばない、道空も心空も同じようなものだけだ。そもそも参玄というものは道空の土でなくては、パット出会つても見てとることは容易でない。これにちなんで曹山大師が頌を作つて云う、今年、田がみのらなければ、来年という種まきどきがある。年少の父を愛するには、白頭の児を生まねばならない。

・如何是實中主 卷十二荷玉「問、如何是客中主。師云、識取好。如何是主中主。師良久。僧曰、客中主与主中主相去多少。師云、作摩」。

・道無心合人云々 卷十鏡清「問、古人有言人無心合道、如何是人無心合道。師云、何不問道無心合人。如何是道無心合人。師云、白雲乍可來青嶂、明月那堪下碧天」。

・一老一不老 法華經十五從地涌出品に出る譬喩にもとづく。「老」とは久遠の仏道修行を続けている人たち(仏子)、「不老」とは時空を超えて若々しい仏のこと。仏法が時と所を超えて永遠に脈々と生きつづけることをいう。卷七夾山の章にこれに関連した問答がある。

興平和尚、洞山礼拝す。師云く、老朽を礼する莫れ。洞云く、老朽に非ざる者を礼す。師云く、他は礼を受けず。洞山云く、亦た未だ曾つて止めず。

興平和尚、洞山が礼拝する。師が云う、老朽に礼拝しなさんな。洞山が云う、老朽でないものに礼拝しているのです。師が云う、それは礼拝を受けんよ。洞山が云う、止めたこともないですよ。

洞又た師を辞す。云く、何れの處にか去く。云く、流に沿いて止まる所無し。師云く、法身、流に沿うや、報身、流に沿うや。云く、惣に是くの如きの見解を作さず。師、掌を拍つて之を誂る。

保福云く、幾個を見め得ず。

又た問う、如何なるか是れ古佛心。師云く、即ち汝が心是なり。此くの如しと雖然いんたも、猶お未だ是れム甲が問處ならず。師云く、若し与摩ならば木人に問取し去れ。

また問う、どついつのが古佛の心ですか。師が云う、ほかならぬお前の心がそつだ。そつかもしれませんがわたしが問つたところではありません。師が云う、そんなら木人に問いに行け。

ム甲に一句有り、諸聖の口を借りず。師云く、汝試みに道い看よ。洞山云く、是れム甲ならず、人有つて問うなり。

米嶺和尚、問う、如何なるか是れ納衣下の事。師云く、醜陋は君の嫌うに任せ、雲霞の色を掛けず。

## 祖堂集卷第二十